



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	家庭科における「学力」としての批判的思考力に関する研究(全文の要約)
Author(s)	土屋,善和
Citation	
Issue Date	2016-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2309/145693
Publisher	
Rights	

家庭科における「学力」としての批判的思考力に関する研究

今日、21世紀型能力などの多様化した社会を生きるために必要な思考力や実践力が学校教育における学力とみなされ、学力向上のための教科指導の充実が進められている。その一方で、生活を題材とし、実践的・体験的な学習からよりよい生活を築くために必要な力を育む教科である家庭科が、学力論の文脈で論じられることはない。このような状況が生じているのは、家庭科における「学力」とはどのような力なのかが明確に示されてはこなかったことが一因として考えられる。家庭科が実生活において必要な力を育み、学校教育の中で学習する意味のある教科であることを示すためには、家庭科における「学力」を明確にする必要があると考えた。

そこで本研究では、家庭科における「学力」を追究するにあたり、批判的思考力に着目した。批判的思考力は、意思決定や問題解決を伴う創造的で実践的な思考力であることから、家庭科が目指す生活を創造するために必要な力とみなされ、批判的思考力を手掛かりとして、家庭科における「学力」としての理論構築が可能と判断したからである。

以上の問題意識から本研究は、家庭科における「学力」として「批判的思考力」を追究し、批判的思考力に基づく家庭科の「学力」についての理論構築及び批判的思考力を育む家庭科の授業のあり方を検討することを目的とする。

第1章では、高校生を対象に実施した質問紙調査を基に、高校生の捉える家庭科の「学力」について考察した。家庭科は、表現力や判断力、問題解決力といった生活に活かされる力を育む教科であるにも関わらず、高校生は、「生活にかかわる知識・技術の習得」を重要視している反面、表現力や判断力等が家庭科で身につく力であると捉えていなかった。さらに、他教科と比較すると家庭科において、これらの力が身につくと捉えている生徒の割合は低率を示していた。また、家庭科観の調査から高校生は、家庭科が生活に関わる教科であることから、家庭科を学習する必要性を認識していたが、必要性を現在の自分の生活に必要なかどうかで判断していると考えられた。以上より、高校生の捉える家庭科の「学力」は、「自分の生活をする上で必要な知識・技術」であることがわかり、実際に家庭科を受けている生徒にとって家庭科は、生活を創造するために必要な思考力や判断力等を育む教科として位置づけられていないと推察された。

第2章では、学力論の変遷を辿り、主に1990年代以降の学校教育における学力について整理した上で、家庭科における「学力」を再考した。学校教育においては「生きる力」や「21世紀型能力」の育成が目指されていることから、今日では、社会を生き抜くために必要とされる実生活に活かされる力が学力としてみなされていることが明らかとなった。一方、女子向けの教科として語られてきた家庭科は、1989年の学習指導要領改訂に伴う男女必修化を境に、家庭科の学習意義を問い直し、男女が共に学ぶことの必要性が説かれていった。そして、家庭科教育の変遷と家庭科において語られてきた「学力」について整理した結果、家庭科における「学力」を、生活を創造するために必要な力である「自分がどのよ

うに生活や社会に対して働きかけていくかを主体的に考える力」とみなした。さらに、家庭科における「学力」である「考える力」とは、多様な視点から物事を捉え、様々な状況を考慮した上で自分にとっての妥当な正解を導き出していく力であり、それは批判的思考力に相当する力であるとの結論が導かれた。

第3章では、家庭科における「学力」として着目した批判的思考力を明らかにするために、批判的思考の概念と批判的思考の能力について国内・国外の文献を整理し考察した。批判的思考は、単に物事を批判的に捉えるだけに留まらず、「合理性」、「省察性」、「創造性」を含む思考であり、Ennis,R.H.が述べるように行動を伴う実践的な思考であることがわかった。そして、批判的思考に関わる力は、情報や知識を鵜呑みにせず、物事の本質をしっかりと捉える力、多様な視点から物事に対するアプローチまたは課題に対する解決方法を多様に考えることができる力、様々な状況を考慮した上で適切なものを取捨選択し判断・実践することができる力であるとみなされた。したがって、批判的思考力とは、実生活で自分がどのような行動をとっていかを判断する意思決定力であることが明らかとなった。

第4章では、批判的思考の能力と構造を具体的に示した Ennis,R.H.の理論を参考に、家庭科における批判的思考力と批判的思考の構造を提起した。本研究では、先行研究と批判的思考の特性、家庭科における学力観を基に、家庭科における批判的思考力を「自分の生活を問い直した上で、課題や将来を見据え、多様な視点から様々な行動を考え出し、具体的な実生活における自分の行動を判断することで、今までにない新たな生活を創造することのできる力」と定義づけた。そして、家庭科における批判的思考過程は、「生活の意識化」「課題の明確化」「行動の思案」「行動の選択」の段階からなり、物事を吟味・検討し客観的・多角的に捉えることに関与する「相互作用」により促されるとみなした。このように、家庭科における批判的思考力は、課題や問題を導き出し、解決方法を考え、さらに自分の実生活での行動を創出する力が含まれたものであり、生活を創造することができる力として捉えられた。

第5章では、第4章で示した家庭科における批判的思考過程に基づき、コーヒーを教材とした授業を実施し、高校生が家庭科における批判的思考過程を経て実生活における意思決定に結びつけるために、どのような授業の手立てが必要なのかを検討した。本授業を通して身近な商品から社会問題を見つめたことで、生徒の理解は深まり気づきが生まれた。しかし、様々な視点で商品捉え、最終的な実生活での消費行動を決定するために、吟味・検討して自分の考えを練り上げていく場面として、「相互作用」が十分に機能しなかったため、消費者としての多様な行動を模索する「行動の思案」から実生活における消費行動を具体化していく「行動の選択」をするまでに至らなかったと推察された。生徒が「行動の思案」をして「行動の選択」に至り自分の生活を創造するためには、生徒が「消費者」という立場に立ちかえって考える場が必要であった。

第6章では、第5章で見出された授業実践上の課題を踏まえ、チョコレート教材として「相互作用」に着目した授業を実施し、批判的思考を促す授業における「相互作用」の

有効性を明らかにした。本授業では、「相互作用」として「チョコレートのパッケージの企画」と「消費者としての商品評価」の場면을授業の中に設定した。本時における「相互作用」によって生徒は、カカオ豆を提供する「生産者」とチョコレートを販売する「企業」、購入する「消費者」という様々な視点から商品を捉えることができた。また、チョコレートのパッケージのデザインと企画で、「フェアトレード」という観点以外からも生産者に配慮した商品を検討したこと、さらにチョコレートを消費者として社会的な観点から評価したことが、生徒の社会的視点の獲得にむすびついた。したがって、「相互作用」によって生徒は、様々な視点から商品を捉え、社会的な視点を獲得することができた。授業を通して生徒は、「消費者」であることを自覚し、社会的な視点から今後の消費行動について考える「行動の選択」に至った。

第7章は、第6章で着目した「相互作用」において、特に生徒同士の関わり合いに焦点を当て、「相互作用」の場面における生徒の談話を分析し、生徒の思考過程を明らかにした。生徒の談話の分析から、生徒にとって「相互作用」の場面が批判的思考を促す場面として機能することで、批判的思考力が育まれると考えられた。そして、物事を明確にしていく、または何かを決定していく場面として「相互作用」を設定することで、生徒は多様な視点から物事を捉え、吟味・検討し意見を練り上げていき、批判的思考が促されてくことがわかった。その際に、生徒同士が意見を出し合うだけではなく、議論をしていく中で生徒の思考が深まるような「相互作用」にすることが必要となる。また、教師が生徒と関わることによって、新たな視点の獲得の契機となり、議論の活性化につながった。つまり、考えを深める議論を促すための、生徒と生徒、生徒と教師の「相互作用」の在り方を検討することが、家庭科における批判的思考を促す授業を展開する上で重要となることが明らかとなった。

第8章では、第5章、第6章、第7章の授業分析を踏まえ、「家庭科における批判的思考力」を育む授業モデルを構想し、さらに授業を具体化する手立てを提示した。生徒は自分の生活を問い直し、把握する「生活の意識化」をして、社会的な課題と実生活における課題を発見・把握する「課題の明確化」をした上で、様々な選択肢を考え出す「行動の思案」をし、自分の生活での具体的な行動を決定する「行動の選択」に至る。そのためには、教師も教材や授業の場면을意図的に設定する必要がある。生徒の思考を促すために必要な授業の場面と教材、問いや情報を教師自身も吟味し、提起したモデルに即した授業を展開することで、生活を問い直した上で実生活での自分の行動を思考し選択することができ、家庭科における批判的思考力が身につくと考えられた。

以上より、家庭科における「学力」としての批判的思考力は、まず自分自身の生活を振り返る「生活の意識化」に関わる力であり、生活分析力といった生活を客観的に見つめて思考する力が伴うものである。さらに、課題や問題を発見する力である「課題の明確化」に関わる力、課題や問題に対する様々な解決方法を考える力である「行動の思案」に関わる力を含み、実生活における行動を選択する意思決定力である「行動の選択」に関わる力として結

実するものである。また、家庭科における批判的思考に欠かすことのできない、吟味・検討し創出する力や客観的・多角的に思考する力を有する「相互作用」に関わる力も挙げられる。このような力を獲得することによって、家庭科における批判的思考力は実生活の創造に寄与する「学力」となると考えられた。

本研究では、家庭科における「学力」としての批判的思考力を追究した結果、家庭科における批判的思考力が実生活における意思決定につながる力であることを提言した。そして家庭科の「学力」である批判的思考力とは、生活を創造するために必要な力であり、実生活に還元される力であることが明らかとなった。